

なほ

2月号
vol. 132

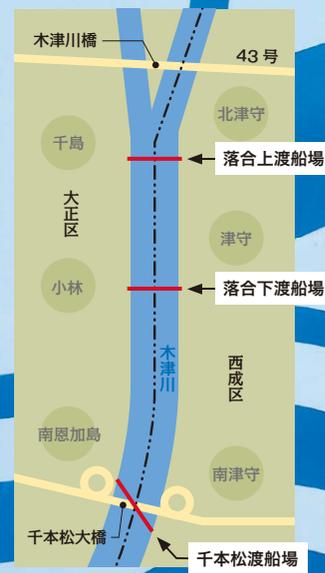
特集

区界浄土
ニシナリパラダイス

「寒すずめの集い」
南津守6丁目付近にて撮影



特集



極私的木津川の記憶

地図帳の凡例では、市区町などを分ける境界線を「市区町村界」と称し、二点鎖線(---)であらわす。西成区は6つの行政区(大正・浪速・天王寺・阿倍野・住吉・住之江)と接し、西は木津川、東は上町台地、北は鉄道ターミナル、南は港湾部に誘導する動線をもつ街である。「なび」創刊当初「しなりの境界線」というシリーズを掲載した。西成に接する境界線上に何かを発見する試みだった。そしてあらためて境界シリーズ「区界浄土 ニシナリパラダイス」を考えしてみた。

区界線プロジェクト
佐々木敏明／安田拓也

西成と大正の行政区は、木津川という一級河川を仲立ちに、川のご真ん中を区界線によって明確に表示されている。幼いころ、父に連れられ何度か木津川上の渡船場に来た。「なんでここに渡し船があるのかわかるか」。答

えに遡っていると「この川には大きな船が入ってくる。そのため人が通る橋を作っても船の出入りが出来ん。だから川を挟んだ2つの町の人たちが、互いに行き交うために今も渡し船を利用してるんや」。それからすぐだったと思うが、安治川にある川底トンネルにも連れていかれた。この時も同じようなことを教えてくれた。その後、車社会の到来を迎え、海面から相当な高さをもつ大規模な橋がいくつも建設されてきた。大阪湾に臨む木津川には、おもに車道専用の千本松大橋、新木津川大橋が建設された。ともに橋梁下を渡しが存在する。「木津川渡船場」は住之江区／大正区の利用者たちの往還路に活用されている。

もう一つは渡船場に関する映画の記憶だ。大島渚が監督した「太陽の墓場」(61年)という映画の冒頭だったかに、木津川の渡船場から降り立った血を売る港湾労働者と、血を売る業者たちの喧騒が描かれていた。おそらくこの男たちは、鶴見橋商店街を釜ヶ崎方面にドヤを求めて歩く男たちではなかったか。映画のシーンが渡船場を強烈に刻印させた例で、極私的ではあるが大島という作家に瞠目させたフィルムだった。

区界浄土

ニシナリパラダイス

3 区界を横断する渡船

大阪市内には渡船場がまだ8か所ある。そのうち木津川管内だけで4航路を営業している。これに木津川運河の「船町渡船場」を入れると5航路になる。今回のテーマである西成／大正の区界線上にあるのは、木津川上流から下流にかけて「落台上渡船場」「落台下渡船場」「千本松渡船場」の3航路である。私はまず「落台上渡船場」からレポートすることにした。時刻は午前6時、冬の夜明けは遅い。見事な三日月と木星がなかよく並んで天頂を飾っていた。真っ暗な木津の川面を、大正区千島の渡船場から一艘の船がやってくるのが見える。船が着くまでは船着き場の鉄扉が閉じられていて、乗船客は開門するまで吹きさらしの待合室で待たなければならない。

落台上渡船場(西成区北津守発着地から)
1月11日6:20〜乗客3名

早朝の2名の乗船客たちに話しかける。「大正区の千島にある特別養護老人ホームに勤務する」という女性。自転車を走らせてきた。「朝の早い時間に出勤するが、シフトによっては時間帯が変わることもあるので、夜の遅くなるシフトの時は、渡船の最終が9時なので乗



早晩の落合上渡船場(北津守)に接岸する「福崎丸」と大正千鳥発着地(後方)

ることができない。そんなときは43号線を自転車で走り帰宅します」と話す。同じ大正区の鉄工所につとめる中年のおじさんに、朝のあいさつをする。「あまりここでは見かけないね」と声をかけてくれた。ここでは同時間帯の乗船者が毎日この船を利用するので、自然に顔見知りになるのだろう。「早朝の勤務を長く続けながら、私は2つの渡船に乗り継いで会社通勤をしている。勤務地は鶴町で尻無川に並行する千歳渡船場(千歳橋の橋梁下を走行)を乗り継ぎ会社に行きます。ただし遅い時間には43号線の木津川橋を渡って帰る」と丁寧に答えてくれた。渡船の乗り継ぎもあ

るのだ。

乗り継ぎでまた一つ思い出すことがある。10数年前、この落合上の渡船場を発し、尻無川の「甚平渡船場」に乗り継ぎ、天保山公園内にある「天保山渡船場」で安治川を渡り対岸の此花区桜島に漂着。USJの正面玄関を確認し、同じコースを往還して帰ってきたことがあった。3つの渡船場を乗り継いでUSJの玄関口を初めて見た体験であった。

落合上渡船場(大正区千鳥発着地から)
1月11日7:00〜乗客3名

中年の男性。「勤務地は西成。シフトがあつて時間は変わるが、今日は早番の日これから西成に行く。もう一人の真面目そうな紳士は「勤務地は西成だが、あまり土地のイメージがよくないので、一刻も早く西成からは帰りたいと希望しています」。

落合上渡船場(西成区北津守発着地から)
1月12日13:20〜乗客3名

西成区内の中年の主婦。「友人同士で大正区内の千鳥公園に遊びに行きます。私自身子ども頃、父に渡し船に連れてもらったこと

りを聞く。「この渡船の利用は1か月に1回くらい。それほど頻繁には利用しているというわけではない。でも便利だからね」。

千本松の待合室までの通路の一角にいくつもの花が飾られていた。10年前、鶴見橋商店街内の診療所に勤務していた女医Yさんの遺体が水中で発見された場所だ。当時は他殺、自殺の両面捜査が行われていた。ホームレス支援を共通の活動とする縁で、ゆつくり話しましょうと話してくれたその数か月後の出来事だった。

千本松渡船場(大正区南加島着地から)
1月12日14:50〜乗客4名

高校生のカップル。「大正区内の高校に通学しています。学校へ行くのに道がないので仕方なく渡船を利用している。通学路として

があり、楽しい思い出です。千鳥公園は美しい公園でもあり2、3か月に1度はこの渡し船を利用して遊びに行きますよ」と楽しげな表情で語ってくれる。

落合下渡船場(大正区千鳥発着地から)
1月12日13:30〜乗客4名

中年の男性。「母親が病身なため、安否確認のために西成の入院先に行くことにしている。そのため渡船は割合利用している」と穏やかに話してくれる。

落合下渡船場(西成区津守発着地から)
1月12日14:00〜乗客5名

中年の男性の話である。「工場で作業する時は西成なので、西成での作業日には渡船を利用して。他地域での作業の際は、この船は使わない。自動車を利用することもあがるが、家から西成までは時間的にわからないので、この



落合下渡船場(津守)を離れる「みどり丸」

日常的に渡船を利用しています」。中年の男性は「仕事で西成に行くため毎日使っている」と話が進んだところで渡船の発着となった。木津川の河川沿岸部は運輸・運搬など流通会社、ステンレスパイプなどの製造会社、食品会社、生コン会社、中にはコンクリートの粉砕、残土処分会社などが居並ぶ。道路上で重量級トラックの行き来は目立つが、人の往来などほとんどない。男性型の業種業態をもつ港湾部自体が大規模な工場のようなものなのだ。ただ渡船についていうと、ごく短時間の、ごく狭い船内の空間での接触は、バスや電車には代えがたい肌触りを得られるように思う。

実際船員である職員に「ありがとう」と会釈をする人たちが多くいるし、顔が見える距離感を大切にしているとも見えた。明治の中期から始まった渡船事業は、現在大阪市建設局の渡船管理事務所が運営し、市民は無料で乗船できる。職員の話では1日の乗船利用客は各渡船場で500〜1000人ほどだという。人と自転車専用で、オートバイなどは駄目なのである。

文責:佐々木敏明



(上)千本松渡船場(南津守)に接岸する「はるかぜ」
(下)Yさんへの供花

50代の営業職の男性は「大阪在住だが、この千本松の渡船は初めての乗船です。今日は自転車で船を利用するのが便利だと思って利用しました。この渡船以外はだいたい利用していますね」。もう一人、40代の営業職の語

千本松渡船場(西成区南津守発着地から)
1月12日14:30〜乗客3名

船を利用するのが一番だと思っている」。ベトナムからやってきた10代後半の青年2人から話を聞く。「去年に日本にやってきた。梱包の仕事で西成の工場でやっている。今から家に帰るところ。住まいは大正です。日本人は親切です。けど日本は寒い。仕事はガンバっています」。ちょっとたどたどしい言葉が混じるなか一生懸命に話してくれた。70代の女性「大正区に住んでいるが、8か月前に主人が大けがをし、津守の病院に入院している。ほんと口もきけなくコミュニケーションが難しくなっている」。おそらく着替えや日用品が入っているのだろう、大きなケースを引いて去っていく。「お大事にしてあげてね」と背中越しに大声で呼びかけると、「ありがとうございます」と笑いながら振り返ってくれた。

虎 糞

おう

えん

だん



第9回

子育てに取り組む人・団体・施設を紹介して、子どもを支えるネットワークをどんどん広げていきます！



おっちゃんに声かけ

「子ども夜まわり」に参加してきたで 鶴見橋中学校

「日雇い労働者の街」として知られる釜ヶ崎では毎年冬場に「子ども夜まわり」の取り組みが続けられています。この夜回りは釜ヶ崎のNPO法人「こども里」以下「里」が野宿生活者支援・子どもの人権教育として行っているもので、鶴見橋中学校からも毎年参加しているそうです。今回は、この取り組みの様子やこれをきっかけに子どもたちが感じ、考えたことを同中学校同和教育主担の川島彰允（かわしまあきひこ）さんに紹介していただきました。

集合から学習会

1月13日（土）の夜7時、続々と生徒たちが学

夜まわりガイドブック



深夜の街を夜まわり



出発前の学習会

時間になりました。
時計の針は10時をまわり、いよいよ夜まわりに出発！毛布やおにぎりをリヤカーに積み込み、子どもたちは一段と冷え込む夜のまちを一歩ずつ進んでいきました。

夜まわりでは…

実際に夜まわりをして、おっちゃんたちの寝床の前に立つと、緊張と不安で声をかけることができずに立ち尽くすメンバーがほとんどでした。そんな中を躊躇なく駆け寄っては声をかけていく里の子どもの姿に驚きながら時間は過ぎていきます。そして意を決して、おにぎりを手渡したり声をかけたりすると、おっちゃんたちから返ってくる反応や「ありがと」というあたたかい言葉に、今まで持っていた偏見や恐怖心が拭われ、つながりが生まれる瞬間を感じる事ができたよつでした。その後は寒さも忘れて日付が変わるまで、一人ひとりに寄り添いながらのやりとりが続ぎ、深夜一時を過ぎて里に戻ってきました。

寒さ、疲れ、眠気はあるものの、自分の足を運び、目で見て、声を聞いたことが貴重な経験に

校に集まってきました。今年の参加数は10名で、参加した経験のある上級生2名以外は初めての参加となりました。路上で野宿をせざるをえない人の数が年々減っていることもあって団体参加は15名まででしたが、出発式には、見送りに来てくれた担任の先生や、活動後の冷えた体をあたためる豚汁を用意してくれたお母さんのような先生を含め20名以上が集まりました。里へ到着後の8時から「これからの釜ヶ崎を考えよう」というテーマで約2時間の学習会。自分たちの大切な「まち」の過去と今を学びながら、変わっていくことと変わってほしくないことを皆で真剣に考えて話し合う、中身の濃い

なったことを一人ひとりの表情から感じる事ができました。最後は静かに自分と向き合いながら感想を書き、一人ずつ発表しました。それらの感想を抜粋して紹介します。

子ども達の感想

1年生 男子：夜まわりでは、自分が思っていたおっちゃんへの考え方が変わりました。普段の生活の中で、おっちゃんたちと話す機会がないので参加してよかったです。もし、自分がおっちゃんの立場だったら、あんなにやさしくできないと思います、おっちゃんたちはすごいなと思いました。

1年生 女子：勇気を出して話しかけてみると優しい人が多かったです。「おにぎりいりますか。」と聞くと「はい」と言ったので、渡すと笑顔でありがと！と言って言ってくれました。普段「ありがと」って普通「言っけど言われるとつれいんだなと感じました。

1年生 男子：参加する前は「かわい」と思っていたけど、全然「かわくなかった。おじさんたちは苦労して生きてがんばっていることがわかりました。

文責：寺嶋六典

【飯島照喜】今年の正月は、戌年ながら走馬灯のように「あつ」と過ぎ去った、年々、その走りが早くなっているように感じる、年齢だろうか。



【沖田一志】ボクは山間部で育ったので雪だるま、雪合戦、そり滑りとか雪遊びの思い出が沢山ある。当時も同じように寒かったはずなのに「寒さ」の記憶は残ってない。思い出ってそんなもん？



【佐々木敏明】強風がすれちがう女の香を残す立枯れの枝みな天に牙をむき三線の音に悔い残し年暮れる



【田岡秀朋】年始早々、厄払いに松尾寺へ。30分おきに20人近くがお堂に集結し、一斉の祈祷。その後すぐに、長男がインフルB型に・・・ここからご利益がありますよーに。



孤立をおそれず、紙面でつながる地域の輪

飯ユラン

意外と好評を博していたらしい完全主観のグルメ記事、飯ユラン。隔月連載で復活しました。西成から解き放たれ、お食に入りの『食』にまつわる店、人などをご紹介します。



17軒目
『喫茶・軽食 クローバー』



宜喜 千恵子(ぎき ちえこ)さん

今月のおとなりさんは、にしなり隣保館ゆ〜とあい内の喫茶「なび」でお仕事をされている宜喜さん(木曜日はゆ〜とあいの受付もしています)。生まれは奄美大島。19歳の時に今のご主人さんと西成区にいられたそうです。現在、子ども7人、孫3人の大家族。子ども好きの宜喜さんは毎日がとても賑やかで充実してるみたい。半面、子守りやお誕生日会、クリスマス、お年玉と大変なことも多いようです。でも家族みんなが家族を大事にしているのがとても伝わってくるから、ほんとに素敵な家族です☆ 趣味は、B'zと福山雅治のライブに行くこと、そしてやっぱり孫の子守り。宜喜家の母として、そしてゆ〜とあいの母としてこれからもよろしくをお願いします。



雨の降る阪急茨木市駅前のバスターミナルは人もまばら、市役所あたりと聞いていたので、水溜まりをよけながら歩くこと10分、ラーメン屋やごはん屋が並び通りに面したビルの1階にシルバーショップの喫茶・軽食店『クローバー』はある。えっ、シルバーショップ？ 確か、おいしい食堂があるって、“行ってみればわかる”そんな謎解きのような知人の一言。“大阪府下でも珍しい、シルバー人材センターの独自事業として経営している店ですよ”(富澤秀雄茨木市シルバー人材センター副理事長)。

カラフルな三角巾、エプロン、厨房に4人、店内に2人とテキパキとした所作。今日の日替わり定食は、チキンカツ。卵スープ、サラダ、なすびの煮物がついてワンコインの500円。ナゲットよりも少し大振りのチキンカツが3つ、コロモは固くなく、だがシャキッと。口に入れると柔らかいなすびの煮物はどこかで食べたような記憶が…、そうそう私の母のような。「すみません、おかわり」、この値段でご飯お代わり自由とは安い。

「スタッフは30人ほど、毎日交代で5〜6人が調理・接客しています。だから同じ煮物でも調理する人によって味が違う、個性が出ます」(クロー

バーの責任者・上島恵子さん)。毎週月曜日10食限定の「安威川ダムカレー」(700円・日本ダムカレー協会認定)は、五穀米のご飯をダムの堤体、洪水吐きをトンカツ、里山の風景を枝豆とピーマンの緑で丸皿に表現。テレビで紹介されると大人気になり、茨木市内の数軒の店が独自の安威川ダムカレーを提供している。だが残念、当日は食することはできなかった。主婦の知恵が商品化された手作りケーキや梅ジュース、花梨ジュースも人気を博している。

シルバーショップ「クローバー」は、茨木に、主婦の知恵や経験に、おふくろの味に“こだわり”、そして調理を通じて、人を元気にそして自分を元気にしてくれる。シルバーというよりもむしろ“ゴールド”ショップだ。



シルバーショップ 喫茶・軽食 クローバー
場所：茨木市駅前3丁目2番1号 杉林ビル1F
電話：072-622-0039
営業時間：10：00～16：00(土日祝祭日 休)

6月 30日 豊間



ハナレバナレになった人とまち。くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

先月の寒波の数日は一日外にいて、太陽の温もりに思わず感謝してしまっただ。うちのアパートは、寒い日や雨の日には窓や玄関扉を閉め、廊下への雨風を防ぐ。各々の家の窓やドアには、カーテンや貼り物をし、部屋を暖かく保ち、夜は廊下の煌々と光る電気を遮る。もう一つは廊下を歩く人の気配を遮るため。夜なら開け閉めは「そー」とするし、機嫌が悪いときは「どたん」と閉める。窓やドアは建具と言って、例えば障子だったり、すりガラスだったり、ドアに小さな小窓を付けてみたり、材料は味わい深い木製のものや、軽いアルミ、強い鉄製のものなど色々。家が家族の生活というプライベートを守り充実させるハコだとすれば、窓やドアは外の環境や人が出入りするフタのような役割。建物に人が暮らす息づかいのようなのを与えてきた。

だから中と外を繋いだり、機械的なものと自然を繋いできた建具の「しつらえ」はいろいろな関係の中で暮らす僕達にとって、きつと大切なこと。

(安田拓也)



【寺島史視】1月に「ゆ〜とあい」の2周年イベントが行われ、和太鼓を演奏。今回、小学生4名が2か月の練習で発表に挑んだ。不安な気持ちがあったが無事に終えることができホッとしている。



【谷口円】「ほぼ日5年手帳(いわゆる5年日記)」を購入。毎年の同じ日の日記がページに並ぶので、3年後や5年後に見返すおもしろさがあるのです。さて、忘れずにつけていけるだろうか…。



【安田拓也】今年の初詣は、楽塾で初めて「石切さん」に。あんなに坂道で商店が賑わう場所だと想像しなかった。腹も満ちたて、坂の町の雰囲気も味わい、今年は地に足付けて登るとします。



【西田吉志】1月13日にゆ〜とあい2周年記念祭を開催しました。ゆ〜とあいや地域で各々が、日々取り組んでいることを発表する場。楽器演奏、ダンス、コーラス、作品などみんなが輝いた一日でした。



号外 マナビバ! 通信

「まずは、おいでよ。」ゆ〜とあいには中学を卒業してから進路を一緒に考える場所と時間があります。そんな“フリースペース マナビバ!”の徒然な日常をお伝えします。

マナビバは毎週火・木曜日の10:00~16:00、ゆ〜とあい2階でオープンしています。
電話:06-6561-8801 Mail:info2@human-ref.jp

アプリのおかげ

一年の計は元旦にあり
「今年の重点目標はこれにしよう」と毎年考えている。生来の不摂生で、最近、お腹がポッコリ。ズボンのベルトがきつくなってきた。そんな自覚症状もあり、「一日一万歩」を今年の目標に決めた。
100歩で1分ほどかかるので、毎日100分。一週間で7万歩。一年間で365万歩。距離にすると、ざっと3000km。日本列島ぐらゐの距離になる。遠大な計画をたてた。元日から毎家の近くを歩き回っている。以前にも同じ誓いをした記憶はあるが、その時は、万歩計を腰に付けて歩いていたら、着け忘れたり、リセットし忘れたりと結局は三日坊主に終わった。
今は、スマホの歩数計アプリを利用して。スマホさえ忘れなければ、本当に便利。勝手にその日の歩数を測ってくれる。時間も記録されているので、何時ごろどれだけ歩いたのかも一目瞭然。あと

千歩ほど足りない時など、寝る前に10分ほど歩く。雨の日など歩くのがおっくうな時は、翌日や休みの日で帳尻を合わせる。記録をつける手間もなく、おまけに体重も1キロほど減ってきた。こうなるとしたもの。歩くのが楽しくなってきた。以前の二の舞にはなりそうにない。
LINEや万歩計アプリの便利さに魅了され、フェイスブックやツイッターにも挑戦したくなってきた。マナビバの活動を情報発信して、新しいつながりを生み出せないかな。

文責…阪井 茂



い湯かげん

「幸福」のための「耕福」

いま、大阪府の社会福祉審議会に「行政の福祉化推進検討専門部会」というものが設置され、議論が行われているが、不肖ボクも委員として参画させてもらっている。議事の模様は、大阪府のHPでも公開されている。駄洒落のように恐縮だが、ボクは、この議論のコンセプトを「幸福のための耕福」と定義したい。つまり、福祉のめざすものは「幸」であり、それは人と人によって「耕」されるものだという定義である。

事業例えば、公園管理のような福祉の視点で見直すことによって実現されるといふ、ネーミングの抽象性とは裏腹で、いたってシンプルな企てであった。そのシンボルが、施設管理などの行政の委託事業の契約先を決める入札制度に、障害者雇用などを加味した「総合評価入札」だった。この入札制度の運用によって、700人超の障害者の雇用が実現したのは朗報であった。

20年それ以前から、大阪府の福祉施策は、一人暮らし高齢者支援等先駆に富んだものであった。その分、国の補助のない単独予算を必要とすることもあったので、財政と福祉の両立は懸案であった。そこで行政の福祉化が優先されたのは、府の予算をほとんど費やすことなく、障害者雇用など福祉施策を実現したことであり、それを裏付けたのは、行政が陥りがちであった「タテ割り」を排した部局横断のプロジェクトの設置であった。それが、ビルメンテナン事業者など民間の創意も誘発したし、エル・チャレンジという「中間支援組織」も育った。

検討部会の審議は、20年も続いた価値を問い直し、よりサステイナブル(持続可能な施策として再構築することに)向けられている。その際「行政の福祉化」というネーミングも、例えば「大阪の福祉化」などに置き換えられることになるのだろう。そこには、大都市大阪で日々惹起する新たな諸問題を、その都度の対処療法ではなく、むしろ「幸福」へのテーマとして「包容」していくことで、人間都市を紡いで行くことという問題意識がある。そして、それを耕すプレーヤーは、何よりも当事者或いは府民の自発であり、それに寄り添う中間支援組織であり、社会福祉法人や民間企業でもあり、

民設民営隣保館「スマイルゆ〜とあい」で4月の本格実施に向けて「西成くらしセーフティストア」(仮称)を1月下旬からプレオープンさせている。ヒューマンライツ福祉協会との連携事業として提案された生活困窮者支援事業の一つで、フードバンクと協働して食材を提供する「無料のコンビニエンスストア」というかんじである。

昨年10月に東京の「セカンドハーベストジャパン」を見学し、大阪でもやってみることにした。生活に困っている方への食品や生活用品の提供をきっかけに、西成区役所や西成区社会福祉協議会、ヒューマンライツ福祉協会等と連携して、自立に向けた相談や支援を継続できる仕組みにしたいと考えている。

また、この活動に賛同いただける企業や個人とつながることができれば新たな地域コミュニティの創造となり、支えあい活動にもなるだろう。この活動が成功するよう努力したい。

(寺本良弘)

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



㈱ナイス代表取締役
富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。



[若松司] 何だか最近、「どうしてこうなった? ニッポン」みたいなモヤモヤ感があって、日本史の高校教科書を読んでいる。「まえがき」に著者の思いが書かれていておもしろい。



[山村裕太] ドラクエ11を買いました。つい先日レベルが30になりました。レベル上げは楽しいです。今年で年齢は30になります。とてもいやす。

地域の縁を心でつなぐ



心の時間

先日檀家様から「仏教って難しくて分かりません。どういう教えですか？」と尋ねられました。私は「仏教の教えとは、当然のことを当然と見る眼を育てる教えです。」と答えました。お釈迦様ブツダとは「さ」とった人」という意味です。そして「さ」とった人」は、このような眼を持った人というのです。

人は生まれた限り「病老、死」を避けて通れません。それなのに「病氣したくない。老いたくない。死にたくない。」と無理なことを思うから悩みが生じます。出会いがあれば、必ず別れがあるのに、別れたくないと思う時、苦しみが生まれるのです。かつて尊敬する先生から結婚式で「夫婦が一生添い遂げるとは、夫婦のどちらかが喪主となることです。限りのある時間だからこそ、精一杯大切に暮らしてください。」とお言葉を頂きました。厳しい話ですが、その通りです。

世間一般では、神社仏閣へのお参りが信心だと捉えられがちですが、本当の信心とは、心を澄ませることです。心が澄むことで、これまで煩惱にささげられ、見えなかったことが見えて来る、気づかなかった大切なことを気づいて行くのです。「心の時間」は、このような「心」を育む時間でもあります。

松向寺 通法

プチ同窓会に参加して考えてみた

去年、ある同級生との久しぶりの出会いから、まわりまわってこの1月行われた鶴見橋中学校のプチ同窓会に参加することになった。久しぶりに会う同級生の顔を見るまではどんな感じか心配してたが、会ってみるとみんな優しく迎え入れてくれた。会うのがほぼ30年ぶりになるので、若干は雰囲気が変わった人もいたが、話したり笑ったりする表情や声などは昔のままでとても懐かかった。

話していくと、誰が誰を好きだったという同窓会あるあるに加えて、保育士、事務会社の運営、車を売っているなど様々な仕事をしていることもわかった。地域で保育士や医療事務を探している時もあったので、こんなことならもっと早く会ってたらよかったのにと少し後悔した。

ただし、同級生みんなが仲良しということではなく、誰が中心になるのかも大きな課題。そんなこともあって、案内の送付、当日の司会、食事の段取りなどを代行するサービスを隣保館でできないか？と考えた。

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感じたことをつぶやいて、西成のまちづくり役に役立てていきます！



なび編集長 寺嶋公典



ゆ〜とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ〜とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび2月号(vol.132)
発行日:2018年2月1日(創刊日:2007年1月1日)
発行:株式会社ナイス
発行人:代表取締役 富田一幸
住所:大阪市西成区長橋3-6-33
電話:06-6563-1156
E-mail:info@nice.ne.jp
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長:寺嶋公典
編集:飯島照喜、沖田一志、佐々木敬明、田岡秀朋、寺島史視、西田吉志、安田拓也、山村裕太、若松司(あいうえお順)
イラスト:hidarimaki デザイン:谷口円

facebook



facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>